



あ
ら
ん
ぶ
ら
ん
ど
う

便所虫の歌

懺悔いたします。
わたしが金曜日の夜から
日曜日の夜まで
どんなことをしていたのか。

荒縄工房

S
M
小説

便所虫の歌

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

マリカになる 6

絞首刑 21

遊戯 45

ケツマンコ 72

フォークとナイフ 108

飢えたメスブタ 140

謎めいた男 168

ボールを握る 193

夜のゲーム 220

激痛の応酬 246

ボロボロの乳房	2	6	8
ゲームオーバー	2	9	1
コンクリート	3	1	7
求めてくれる男	3	4	0
月曜日だから	3	6	6
残忍ないじめ	3	9	2
厳しい拷問	4	1	9
いきつぱなし	4	4	6
生まれながらの便所虫	4	7	8
奥付	5	0	7

マリカになる

懺悔いたします。わたしが金曜日の夜から日曜日の夜まで、どんなことをしていたのか。

マリカと名乗っています。本名ではありません。早いもので二十七歳になってしまいました。

ある団体の職員をしています。OLということになるのでしよう。毎日、そこそこ忙しく、そこそこ緊張感のある職場です。ただ、月曜日から金曜日まで、疲れて帰宅するとため息が出るしまうのも事実です。

「君、いつも完璧だね。ありがとう」

部長から声をかけていただきませす。少し微笑み、頭を下げます。

「すごいわよね、あなたがいれば、この部門、誰もいらないんじゃないの？」

同僚からそう言われたこともありませす。イヤミでしよすが、気になりませせん。

「ねえ、たまにはわたしたちと付き合ってよ。合コンよ、もちろん。出てくれたら男たちっけてっこう、食いついてくると思っただけどなあ」

部署が変わるなどして、わたしのことをよく知らないう同僚に、誘われることもありませす。

ですが、キツパリとお断りしています。

「まさか、門限とかあるんじゃないわよねー」と笑われますが、どう思われてもいいのです。

わたしは、忙しいのです。

欲望を満たすために……。

マジメな仕事ぶりが幸いしてか、男性陣たちは「病気の母親がいて、看病しているらしい」とか「おばあちゃんの介護もしているとか」などと、わたしは臭わせたことさえないようなウワサを信じてくれているのです。

たいがいのことを「個人的な事情があるので」と曖

昧にお断りするので、憶測されるのでしよう。

みんながわたしの正体を知れば驚くでしよう。いえ、もはやわたしを女性とも人間とも見てくれなくなるでしよう。

それほどのことを欲望のままに、しているのですから。

わたしは週末だけ、本来の自分、つまり “マリカ” に戻ることができません。金曜日。勤務を終えて帰宅したあと、一度お風呂に入ってから、改めてマリカになるのです。

わたしがしていることは、誰にも言えないようなこと
とです。

ある掲示板に書き込みをして、街のどこかで待ち合
わせて、見知らぬ人のご命令に従うのです。マリカは
絶対にNOと言いません。だから、人気があります。

その掲示板の名称は「便所虫の歌」。

悲しげで滑稽でしょうか。それとも、想像したくな
いほど、恐ろしい名称ではないでしょうか。

ごく普通に生活する者には無縁の世界。

身も心もボロボロになることを求める者だけが許さ
れる、行ってはいけない場所。

女の便所虫はそれほど多くないようです。掲示板を見ていれば、マリカがどんなことをしてきたか、だいたいわかるので、それなりに勇氣ある方が利用してくださいます。

はじめてそこを利用したとき、これで自分は終わると思いました。

マリカと名乗って公園で一時間、待ちました。やつと声をかけてきた人が相手だったのですが、男性であったことしか覚えていません。

「うそ。まじで、あんたなの？ 便所虫だよね」

「はい。マリカです」

「ドツキリじゃないよね」

金曜日の深夜に、そんなわけないと思いますが、男の人はやたら警戒していたのを覚えています。

そのあと、彼と近くのホテルに行きました。ホテルへ行くことは考えていなかったのですが、彼が誘うので、マリカは「いいなりになる」ことを自分に課していましたから、「いいえ」という言葉は封印していたのです。

すべてを受け入れること。なんでもさせていたただくこと。

そんな恐ろしいことをしたくなかった気持ちについて

は、聞かないでください。いずれお話することもある
かもしれませんが、取るに足らないことです。

普通にエッチをしたと思います。あまり覚えていな
いのですが、できるだけ気に入られるように、お人形
じゃないように、全身全霊でそういうことが好きだと
わかってもらえるように、一生懸命だったと思います。
そうしなければ、次はないから。

マリカはNOと言わないだけではなく、相手が望む
ように反応します。

マリカは奔放で限界を知らないのです。

その後も、その人と何度か会っているようなんです

が、残念ながらまったく顔は思い出せません。渋い声だったような気はします。

おかげで、最初の方は掲示板「便所虫の歌」にマリカのことを誉めて書いてくれました。

そのあとには、かなり楽になったというか、すごく簡単に出会えるようになりました。警戒されて一時間も待たされることはなくなりました。望みが叶ったのです。それから、評判を落とさないように、務めてきました。

どんなことでも全力でやってきました。

マリカはわたしとは別人格と行ってよく、だけどま

ったくのわたしなのです。すごい変態女で、酷いことをいっばいされたいと思っています。

だけど、数週間はやさしい人ばかりというか、物見遊山とでもいうのでしようか。そう「お試し」ですね。そんな感じが続きました。ただエッチするだけ。場所はホテルとは限らず、その人の家だったり、公園だったり、車の中だったりもしました。

一カ月ぐらいしてから、しだいに怖い人にも出会えるようになってきました。

マジメにやってきたからでしょう。だんだん、お客様は本気になってくれるようになったのです。

たいがいの人は、わたしのバックに恐ろしい組織があつて、下手なことをしたらやられると思つていようでした。

残念ながらそんなものはなく、マリカは生身の肉体だけの存在なのです。守ってくれる組織などはありません。

相手のことはまったくといっていいほど覚えていない自己中なもので、相手の人が言わない限り、その人と前にも会つたなんてまるで思い出せないのです。

公園で待ち合わせ。いきなり街灯の下にひざまず跪くように命令され、おしつこを頭からかけられる……。

これだわ。マリカがしてほしいことはこれなの。

やつとこういう人に会えた……。

引っぱたかれて、首を絞められ、公園の茂みで犯されました。

お腹を踏まれながら写真を撮られました。

それが、決定的だったと思います。

その写真が掲示板に貼られてから、マリカはさらに、わたしが望むような稀少な人たちと出会えるようになったのです。

覚えていることは、金曜の夜から日曜の夜までにわたしの体の上で起きたことだけ。マリカの記憶はそれ

だけなんです。

そして月曜日からは、どこにでもいる働く女がいます。マリカのことなんてすっかり忘れています。

「この書類、大至急お願い！」

「先方に謝罪に行ってくれないかな」

「この件では絶対に譲らないで、強気で交渉してきて」

毎日、朝から定時の退社時間まで、わたしはほとんど暇なく働きます。それはすべて、マリカになるために大切なことだから。

すごく都合のいい自分がいます。

マリカでいる間、ほとんど覚えていないのが悔しくなってきた、合間を見て、スマホにメモするようになりました。マリカ専用スマホには、卑猥なメモがぎっしり。

ときどき、読み返します。

ろくに覚えていないことをこうして読み返しても、正直、実感がわきませんが、苦痛や悪寒、恐怖はそれなりに身体的に甦るような気はします。

本当にこんなこと、自分でしたんだ……。あんなことをされたんだ……。

たしかに肉体は傷つき痛んでいます。だから、きつ

と事実なのです。

これから、そんなマリカの週末についてお話をしたいと思っています。マリカの残したメモを痛みの記憶をたどりつつ、わたしなりに思い出してみたいのです。

本当の意味で、わたしがマリカになるための旅なのです。

絞首刑

梅雨空でした。ときどき小雨が降って傘が手放せません。目印の公園の街灯。濡れたヤマボウシの白い花がその光で照らされている。こんな場所で咲いても誰も気にもとめないでしょうに。

そこで待っている男性に声をかけました。

「マリカです」

男は一人でした。

「見せろよ」

トレンチコートの前を広げました。素肌に冷たい風

が染み込みます。

「便所虫 マリカ」と男は声を出して、お腹に転写シールで貼った文字を読みました。その下には黒いパンストのゴムの部分。

「ついて来いよ」

彼のあとを追いました。

かなり早歩きで、ついていくのが大変です。体が大きくて、歩幅も大きいのです。ついていくのが当然であり、ついていかなければなりません。もし相手を見て断ったなどと掲示板に書かれたら、マリカとしての存在を失うようなものです。

どんな相手にも必ずついていく、なにをされても文句を言わない……。。

その評判を失いたくないのです。

公園にほど近い街道に面した一角。夜でも走行音などかなりうるさいところです。

廃屋のような四階建てのビル。一階に店舗があつたようですが、その看板は壊れて中の蛍光灯を入れる部品が剥き出しになっています。シャツターに張り紙がいくつもあります。どれも古いもので、剥がされたあともたくさん残っています。

見上げて、どの階も真っ暗です。男は外階段を上

がつていきます。会った瞬間は、それほど怖い人だとは思いませんでしたが、とても怖いところに連れていかれているようです。

行ったらダメ。そう思うからこそ、考えないようにしてついでいきます。

ガツンと音を立てて鉄の扉をあけると、「来たぞ」と中に声をかけました。

パツと明かりがついたのですが、野外で使うようなランタンでした。もう一人いて、そのシルエツトが動きます。

よく見えませんが、ホコリっぽくて、長年、放置さ

れているようです。

コートを脱がされました。

「靴も脱げ」

ヒールから足を抜きました。

パンストだけの姿。

待っていた男がもてあそんでいるのは、絞首刑にす
るときのように、輪を作った縄です。頭からその輪を
通すと、ネクタイのようにぎゅっと締めてきました。

「うっ」

男たちは笑います。

手が伸びてきて、乳房をつかみます。しばらく感触

を楽しんでから、鷺掴みにして握り潰そうと力を入れ
てきました。

「ぐぐう」

「痛いか？」

「はい」

「泣き叫んでいいんだぞ」

「いたい！」

許可をいただければ、思い切り声を上げます。お好
みのままに。

LEDのランタンなので白い光が低い位置からわた
したちを照らしています。そのため、明るく見えてい

る部分よりも、むしろ影の方が多くて、幻想的です。

「これを使つてやろう」

パドルを男は持っています。固い木。まな板のよう。女を無慈悲に叩くための道具です。

「ケツを出せ」

お尻を突き出します。バーンと音が響いて、お尻をぶん殴られました。

「ぎゃー」

痛くて前に数歩、出ましたが、それで喉に縄がぐつと食い込みました。

「誰が動いていいと言った」

「すみません」

バーン。

「ぎいいいい」

強烈な痛み。右、左とお尻を打ち据えてきます。足が震えて、立っていられないのですが、しやがもうとすると、縄をぎゅつと引つ張られます。

手で縄を持ち、少しでも緩めようとするのですが、彼らが思い切り引くと、指を間に入れられないぐらい締まってしまふのです。

死にたくない……。

お尻を高く上げるしかないのですが、そこを狙って

パドルが打ち据えられます。

「ひいいい、たすけてええ」

泣きながら情けない声を出します。

「正座しろ」

足を蹴られます。

腫れ上がったお尻を、ふくらはぎの上にのせます。

「口をあけろ」

さつそくのご挨拶です。

ぶらりとした男のものが差し出され、先っぽが舌の上に乗りました。

どうすればいいのかと思ったのですが……。

「飲めよ」

ちよろつと、暖かい液体が流れてきました。それを飲み込んだとたん、奔流が口の中へ。

「あがあああ」

粗相のないように必死に飲みます。

口からあふれて顎から喉、そして胸へと伝わってきます。

「さすがに便所虫だ。うまいこと飲むな」

「おれのもだ。一滴もこぼすんじゃないやねえぜ」

二人続けての飲尿。

たとえばみれば、ジョッキに入ったお茶を立て続け

に二杯、いつきに飲むようなものです。これができるようになるのに、マリカはそれなりに練習を積んできたのです。それでも勢いのよい水流は、あふれて体を濡らします。

「こぼしやがって。下手くそだな。あとでその分も罰してやる」

ニオイは実はこうやって飲む限り、それほどではありません。味は……。しよっぱかったり、苦かったり。なかなか慣れることはありません。体が拒絶反応を示すので、必死に抑え込むのです。

男はそのまま口の奥まで入れてきました。

ジュボジュボと尿混じりの唾液で、太く固い男根をしゃぶります。

「どうだ。小便で汚れたチンポを、まんこに入れてやろうか」

口が塞がっているので、返事はできません。

お尻を両手で持ち上げるもう一人。

ビリビリとパンストを破ります。股間のところだけ。

「お先に」

指で穴を探ってきます。濡れているようです。その様子を乱暴に確認しています。

ぐいっと広げて差し込んできました。五日ぶりの感

触。熱い……。

「がふうう」

しゃぶりながらも、声を上げてしまいます。

「こういうのを知ってるかな」

しゃぶらせている男が、ベルトのようなものを腰につけました。黒いベルトには左右に靴の踵かかとぐらいのべ

ろが下がっています。そこに三センチぐらいの長さの針が、華道で使う剣山のように植え込まれています。

しゃぶっていると、顔のすぐ横にその針先があります。す。

「気をつけろよ。顔を傷つけないかな」

ちよつとでもズレたら、ぐさつと頬を貫くでしょう。

「交代しようぜ」

後ろの男が声をかけました。

ジュポツと音を立てて、口の中から固く大きな男根が引き抜かれました。

ゲホツとむせながら、だらつと涎を垂らしました。

「口にあれをつけさせたほうがいいぞ」

「そうだな。噛まれたら大変だ」

男は金属の輪をマリカの口にはめ込み、それについているベルトを頭の後ろで留めました。口を閉じることはできません。金属を噛むと、とても不快な味と感

触です。

「いい具合に腫れているな」

後ろに回った男は手綱のように首の縄を引きしぼりながら、自分たちが叩きのめしたお尻を撫でていきます。とても熱くなっていて、ヒリヒリしています。

「これは痛いぞ」

男がべちやべちやになっている穴に挿入してききました。同時に腰につけた剣山が、その腫れたお尻に刺さったのでした。

「がああああ」

全身を震わせて、痛みを訴えます。彼らの答えは笑

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一五年六月三十日刊行 第一版

著作権 あんぷらぐど (荒縄工房)

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。